平成 29 年度　地域文化学専攻・比較文化学専攻　学生派遣事業　研究成果レポート

呂　怡屏

１．事業実施の目的

1）台湾台南市の G 集落でおこなう年中行事の実態の調査。

2）カナダ・オタワで開催される「カナダ人類学会と国際人類学・民族学科学連合会議/中間会議」（CASCA and IUAES Conference / Inter Congress)での口頭発表

２．実施場所

台湾台南市の G 集落

カナダ・オタワにおけるオタワ大学

３．実施期日

平成 29 年 4 月 21 日（金）から　5 月 17 日（水）

４．成果報告

●事業の概要

報告者はフィールド調査地である台湾台南市の G 集落でおこなわれているシラヤ族の年中行事の野外調査を行った。調査の結果は下記の通りである。

台湾における原住民族の社会運動と文化復興の取り組みにおいて、宗教は重要な要素とみなされてきた。近年、原住民族としての法的な地位を求めているシラヤ族の人々が伝承してきた「アリッ」信仰も、この点において注目されてきた。今回の野外調査では、住民の 8 割がシラヤ族である G 集落でおこなう「番仔換年」（原住民の年越し）という年中行事の内容について調査をおこなった。これは、シラヤ族の神である「アリッ」を祀る行事である。G 集落において、「アリッ」は「アリッボ」と呼ばれている。具体的な調査は、G 集落において「アリッボ」を祀る「大公廨」（ダイコンカイ）で行う行事のプロセス、参加者の構成、集落住民の参拝方法と、供え物の内容と特徴を観察した。

清朝時代に書かれた歴史史料では、3 月もしくは 4 月に行われるシラヤ族の祭りは神に降雨を祈るものとされていた。現在、この祭りは旧暦 3 月 29 日に実施され、G 集落においては「番仔換年」という名称が与えられており、「アリッボ」の誕生日とも認識されるようになった。今回の調査により、記録した「番仔換年」の行事の構成と内容を以下にまとめる。

G 集落では、「番仔換年」が年中行事として定着しており、集落住民が自律的に準備し実践されていくものとなっていた。信仰の面からは、「アリッボ」が祀られている「大公廨」ならびに「角頭公廨」（ガッタウコンカイ）という施設に参拝することから、シラヤ族の伝統が踏襲されていることが理解できる。一方で、供物については、シラヤ族の伝統食である

「Dubi」（バナナの葉で包む四角形のおもち）と漢族の特徴を有している「三牲」（鶏一匹、豚肉、魚一匹）が用いられていること等が明らかとなった。

また、「アリッボ」の生誕祝いに際して、「アリッボ」へ献上するものの中に、漢族の娯楽である布袋戯（プータイシー、人形劇の一種類）が含まれていた点も、シラヤ族の「番仔換年」が漢族文化や慣習の影響を強く受けていることを示すものとして理解できた。

調査の対象とした「番仔換年」の行事では、古くから受け継がれてきたシラヤ族の特徴、たとえば参拝の方法や伝統食が保たれている一方で、「三牲」や人形劇（布袋戯）の献上といった漢族文化が強い要素が組み込まれた、エスニシティの二面性が祭祀に見られることが確認できた。

今後はこのテーマを続いて研究していくとともに、さらに祭祀において実践者である女性と男性の役割分担を注目していきたい。

●学会発表について

上記調査の後、5 月 2 日から 7 日に、カナダのオタワ大学で、「MO(U)VMENT」をテーマとするカナダ人類学会と国際人類学・民族学科学連合会議/中間会議(CASCA and IUAES Conference / Inter Congress)に参加し、発表をおこなった。会議は、1）World in motion、2)Living landscapes、3)Moving bodies、4)Relational movements の 4 つのテーマに基づき、18 個のセッションがおこなわれた。

報告者の発表は、1）World in motion のテーマにおいて、Joshua Smith (University of North Carolina in Chapel Hill) 氏と Maureen Matthews (The Manitoba Museum) 氏が主宰した“What do indigenous artefacts want？”というパネルに参加した。当パネルにおいて、これまで台湾原住民族のシラヤ族は、集落の環境整備に合わせて、文化復興のために視覚的な手法を用いて民族イメージを表現することを、「Advancing Ethnic Identity through Revitalizing ethnographic collections of Siraya Pingpu People——In the Context of Aboriginal Recertification Movement in Taiwan」と題して発表した。

ここでは、台湾における政権交代に伴い文化政策が変遷していくことから分析し、シラヤ族の集落の環境整備・モニュメントの設置によって民族イメージを作り出すプロセスと、現在設置しているモニュメントがシラヤ族としての意識を育むことにもたらした影響について報告した。

質疑応答では、まず、台湾における漢族、平埔族、シラヤ族など民族集団の政治的関係に関する質問が寄せられた。また、博物館の収蔵品と、それらのかつての所有者、文化的な担い手となる集団との間の新しい関係性の構築のありかたが提起された。さらに、町づくりの事業において、様々な主体やグループの間の連携もしくは衝突の実態が記述される必要性が議論され、文化復興と文化政策の中に含まれたイデオロギーについて考察を深めるべきといった助言が得られた。

そのほか、会議が開かれる前に、会議場の近くにある Canadian Museum of History の

見学をした。同館の常設展示では、カナダの先住民（First Nation）の文化と生活様相を中心軸にして展示が展開されている一方で、特別展示を通じてカナダにおける人びとの生活史が示されている。同館の民族学的な展示内容を来館者に伝えるために、カナダの北西海岸先住民の物質文化を展示する広場（Grand Hall）に、展示内容に関する資料を入れてあるデジタルアーカイブを設置して、とくにカナダの先住民の現在の文化伝承の実態と、彼らの語りをめぐる記録映像が観覧できるようになっていた。このような収蔵品と人びととの繋がりの示し方は民族学博物館の教育手法の１つの事例として参考になった。

●本事業の実施によって得られた成果

報告者は平成 29 年 4 月末に G 集落におけるシラヤ族の神である「アリッボ」にまつわる「番仔換年」という年中行事を観察し、集落住民の参拝状況を記録した。今回の調査で得られた集落住民の信仰により維持されているエスニシティのありかたをめぐる資料は、博士論文の執筆に必要不可欠なものだった。

●本事業について

本事業により、博士論文を執筆するうえで必要となる一次資料を得るためのフィールド調査が実施できた。また、本事業の支援で、研究成果を海外で開催された国際学会において発表することができた。異なる地域からの研究者との交流によって、このテーマに関して今後の研究において掘り下げるべき課題に関する示唆を得た有意義な機会となった。以上の点から、本事業は、学生の研究活動を支援する非常に有意義なものであると考えている。